



コロナ感染予防へのお願い

先日14日(水)のニュースからの引用です。「WHO(=世界保健機関)のテドロス事務局長は14日、新型コロナウイルスの世界的な大流行について、終わりが見えてきたと述べました。テドロス事務局長『パンデミックの終わりに向けては、かつてなく良い状況だ。まだその段階ではないが、兆しは見えてきている』WHOのテドロス事務局長は、先週1週間の世界の死者数が2020年3月以来最も低かったとして、収束の兆しについて前向きな見通しを示しました。その上で、『ゴールが見えてきたマラソンランナーのように、より力強く走りきるべき時だ』と述べて、それぞれの国に感染防止の努力を続けるよう呼びかけています。」という内容です。また、米国のバイデン大統領は18日(日)、米CBSテレビの番組で、「新型コロナウイルス感染症のパンデミックは『終わった』との認識を示した。」という報道で批判を浴びています。

学校現場では、日々コロナ感染についての情報が錯綜しています。中々収束と言われても実感が伴いません。重ね重ねのお願いですが、**レベル2が続いている状況**ですので、**家族で風邪症状がみられる場合は、登校させず、出席停止となります。**

これから音楽会など学校では、子供たちの活躍する機会が増えてきます。感染防止の観点から是非、ご協力をお願いします。

☁ひこうきぐも✈ vol.8 ※イギリスへの哀悼の意を込めて

イギリスはよく保守的な国だと言われがちですが、旅をしながら思ったことは、決して保守的ではないということでした。ロンドンっ子は、外国人に対して無関心ですが、それは決して冷たいという訳ではないのです。道に迷ったりしていると、誰かが親切に道を教えてくれます。かの有名なロンドンの2階建てバスでも、どこで降りてよいのか分からないとき、近くに座っている人が、どこで降りればいいのか教えてくれたことが、何度もありました。紳士の国たる所以でしょうか。逆に道に迷ったロンドンっ子が、明らかに日本人の顔をしている私に道を尋ねてくることもあるのです。



ロンドンでは、あらゆる人種を見ることがができます。インド人、中国人、アフリカ人、アラブ人、etc…。彼らの多くは、ホテルや食堂で、またバス会社や地下鉄で働いているのです。このように、日本と同じ島国でありながらも、多くの外国人が当たり前のようにロンドンで生活をしています。こういうことから前述したように、私にも道を尋ねてきたのでしょうか。熊本の街中で、外国人に「市役所はどこですか?」と尋ねる日本人はまずいないでしょう。

こんな英国人氣質を寛大な無関心と呼んだ人がいますが、まさにピッタリと言っていると思います。また、英国人氣質を熊本弁で言うところの「わさもん」でもあります。なぜなら、南極大陸へ探検家を送り込み、ビートルズを生み、ミニスカートやパンクを流行させました。そして、あえて自動ドアを取り付けないデパートやロンドンタクシーなどは、「もっこす」とも言えるのです。

※「ひこうきぐも」は、あくまでも荒木が旅をした当時、約30年前の街の様子です。現在とは状況に違いがあることをご了承ください。